

素顔拝見

崩壊型



口腔再建外科

小林 正 治

平成15年1月1日発令により、口腔再建外科講師に採用いただきました。これまで以上に、臨床・研究・教育と頑張る所存です。今後ともよろしくお願いたします。

私が新潟で暮らすようになり、26回目の春を迎えました。新潟の女と家庭を持ち、二人の子供は今年高校と中学に進学します。崩壊型。これは、私の家庭を表しているのではありません。私の出身地のアクセント分類を表しています。私は、茨城県結城市に生まれ育ち、高校は越境して栃木高校を卒業しました。茨城と栃木の言葉は東関東方言といい、言語学的には京阪型や東京型に分類できない崩壊アクセント(もしくはI型アクセント)とされています。お笑い芸人のつぶやきシローが使う、あの言葉に抑揚がなく、語尾に向かって尻上りとなる独特の方言です。新潟に来て、自分に方言があると認識するまで、ほぼ標準語を話していると思っていたのでショックでした。今では、あまり方言は出なくなったのですが、妻子に言わせるとやはりおかしいのだそうです。私には、雨と飴の区別がつきません。「アメが降ってきたな」と言うと、子供に「飴は降らないよ」と言われま。柿と牡蛎も、橋と端と箸も区別がつきません。覚えようとするのですが、なおさら混乱してきます。幼い頃に身についた母語の発音習慣は、そこから抜け出るのが難しいようです。

私の趣味のひとつが、土いじりです。ガーデニングというよりは、園芸という言葉の方がしっく

りときます。花の咲いた苗も時々購入するのですが、基本的には種や球根から育てます。春と秋に種を蒔き、それを育苗ポットに植え替えて育て、コンテナや花壇に定植します。芽が出て、苗が大きくなり、やがて花を咲かせる過程を観察するのが、私のストレス解消法です。通販の園芸カタログから、咲かせてみたい草花の種や球根を選んで注文をすることが多いのですが、私の育て方との相性もあるようで、なかなか思うようには行きません。逆に、苗の成長とともに予想以上に素敵な寄せ植えができたりもします。これがまた面白いのです。

口腔再建外科(組織再建口腔外科学分野)では、一昨年の秋に東京歯科大学から齊藤教授をお迎えし、講座の再構築を行ってきました。今まさに、いろいろな種を蒔いているところです。これから5年後、10年後にどのような花を咲かせることができるか楽しみです。私としても、医局員とともにいくつかの苗を育て、素敵な花を咲かせることができるように頑張りたいと思っています。

*



予防歯科診療室

廣 富 敏 伸

平成14年4月1日をもちまして、歯学部附属病院助手として予防歯科診療室に配属されました廣富(ひろとみ)と申します。かなり変わった名前ですが、家族と親類以外では私自身もほとんど聞いたことがありません。素顔拝見の原稿執筆を依頼されましたが、趣旨は新任教官の自己紹介とのことですので、それに沿って稿を進めたいと思います。

生まれと育ちは北海道で、新大歯学部には平成

3年4月に入学しました。歯学部の中で新大歯学部を選んだ理由は何とも単純なことに、2次試験の科目に理科が無かったためでした。最初の2年間の教養は、歯の診療室・岩久教授の言うところの「五十嵐で放牧」状態の、ぐうたらな学生生活を送っていました。その後学部が上がって、その生活は一変…するはずもなく、再試験を山ほど受けるという有様でした。きっとこの稿を読んでいる諸先生方の中には、「あ〜、アイツか」と心当たりのある方もおられるでしょうが、どうか御容赦下さい。

歯学部学生として最後の、総診での1年間は私にとって正直言って「地獄」でした。毎日毎日、得体の知れないプレッシャーを感じ続け、鬱病になるのではと思った程でした。そのプレッシャーが、一体何によるものなのかは今考えても全く分かりませんが、予診担当として総診に行くと、当時のことを思い出して何ともイヤな気分になったりもします。もちろん、現在の総診の体制とは全く関係がないことを付記しておきます。

このような状態でしたので、当初は大学に残ろうとは全く考えてもいませんでした。しかし結果的には、予防歯科学講座の大学院に進学しました。その理由を、外的要因から考えてみても、宮崎教授から「一緒に研究しませんか？」と誘われ、すっかり舞い上がってしまったためか、あるいは当時在籍していた某1先生に連日夜遊びに連れて行ってもらい、すっかり骨抜きにされたためか、あまりハッキリしません。しかし内的要因としては、卒業後すぐに大学から外に出しまうと、後で戻りたくなくてもそれは容易でないこと、さらに疫学という学問の分野に多少興味があったこと、が挙げられます。

自分に与えられた役割として、「研究・診療・教育」の3本柱があると考えています。そのうち研究については先にも少し触れましたが、大学院から現在に至るまで歯周病の疫学を課題としています。その具体的内容はややマニアックな面もありますので、今回は省略としますが。残りの診療と教育について、私が常に心がけていることがあります。それは「優しくありたい」というものです。患者さんに対してはもちろんですが、学生さんに

対してもそうありたいと思っています。これは、自分がダメ学生であったことと関連していると思われる。もちろん、時には叱ることも優しさのうちであると分かってはいますが、それができないことも時々あったりします。

自分が学生だった頃のことを中心に簡単に自己紹介をさせていただきましたが、今後ともよろしくお願い致します。

＊



組織再建口腔外科学分野

加納 浩之

平成14年9月1日付で、大学院医歯学総合研究科・顎顔面再建学講座・組織再建口腔外科学分野の助手に就任しました加納です。最近あまり自己紹介をする機会がなく、締め切りが間近に迫っても何を書いてよいやら思いつきませんが、今一度、自己に照会するつもりで自己紹介させていただきます。

出身は成田山と成田空港のある千葉県成田市で、出身高校は佐倉高等学校です。ご存知の方も多いと思いますが、ミスタージャイアンツ長島茂雄さんの母校であり、あの藤木直人も卒業生です。長島茂雄を先輩に、藤木直人を後輩にもつ私はどんな人間かといいますが、仕事では藤木直人（のつもり）、お酒を飲むと長島茂雄といった感じでしょうか???

平成5年に新潟大学歯学部を卒業後、第一口腔外科に研修医として入局しました。2年間の研修の後、長野赤十字病院口腔外科に勤務する機会をいただき、平成10年から第一口腔外科（現口腔再建外科）に戻り、現在に至ります。もともと口腔外科の臨床に興味があって入局したので、大学病院以外の病院で多くの患者さんを診察し、臨床経験を積む機会を与えていただいたこと、大学に戻ってまた違う視点から臨床をみるようになった事が、今の自分に非常に大きな意味を持っていると

思っています。大学に戻ってからは、顎変形症を専門とし、変形症患者さんの治療方針立案から手術、治療後の評価について、諸先輩方のご指導のもと、臨床・研究を行ってきました。たくさんの悩みと心配を抱えて手術に臨んだ患者さんが、無事に手術を終えて笑顔で退院していく姿をみるのが、私にとっては一番の癒しになっている気がします。

大学という組織は、研究も非常に大切ですが、臨床のレベルも一流であることが必要ではないかと思えます。地域の開業歯科医や関連病院の先生方に信頼を得られるような治療を行い、病診連携が効率的にすすみますよう、微力ながら努力していく所存であります。今後とも皆様からのご指導をお願いいたしまして、自己紹介の挨拶とさせていただきます。

✧



細胞機能制御学分野

助教授 松田 明 生

平成14年10月より細胞機能制御学分野（川島博之教授）の助手としてお世話になっております松田明生と申します。こちらにきて4ヶ月余りになりますが、まだ担当講義などを受け持っていないので、学生や教職員のほとんどの皆様と面識はありませんが、どうぞ宜しくお願い致します。

私は、平成2年に東京理科大学理学部応用化学科を卒業しました。大学では専ら物理化学、有機化学、無機化学といったケミストリー中心の講義、実験でしたが、4年目にたまたま東京医科歯科大学難治疾患研究所の寺岡弘文助教授（現：教授）の研究室で卒業研究をさせていただけることになり、初めて生命科学の研究にふれる機会を得ました。アミノ酸の種類もまともに答えられないレベルからのスタートでしたが、何となく面白そうだなと惹きつけられ、結局その道に進むことになりました。大学院は北海道大学免疫科学研究所（現：

遺伝子病制御研究所）の菊池九二三教授の研究室に進み、そこで学位を取得しました。菊池教授は、蛋白質脱リン酸化酵素（プロテインホスファターゼ）の先駆的な研究をされてきた方で、私もチロシン残基特異的ホスファターゼであるチロシンホスファターゼの研究に着手しました。当時、最初のチロシンホスファターゼの報告からまだ2年しか経っておらず、その活性を測定するにもまず基質の調製が必要でした。基質として、チロシン残基のみリン酸化されている蛋白質を使うため、ウサギ脾臓抽出液をいくつかのカラムで分離精製し、チロシンキナーゼを得ることから始めました。このように、大学院時代は動物の臓器や細胞の抽出液を材料とした蛋白質を扱う、いわゆる昔ながらの「低温室のバイオロジー」にどっぷりと浸かっていました。今になって考えると、この経験は大変貴重でした。生化学や分子生物学の実験に少しでも携わった人ならすぐに気が付くことですが、遺伝子 DNA と蛋白質では後者の方が圧倒的に扱いが難しいのです。これは、DNA の物理化学的性質がほぼ変わらないのに対し、蛋白質はその種類により個性が様々であることに因ります。

「プロテオミクス」という言葉がここ数年脚光を浴びていますが、ヒトゲノムの全貌がほぼ明らかとなった現在、生命科学研究は遺伝子から蛋白質にシフトしつつあります。新しい技術の開発も後押ししていますが、自身の経験も生かした「プロテオミクス」的な研究もこれからできればと考えています。話が逸れてしまいましたが、学位取得後すぐに米国ロードアイランド州、ブラウン大学の武田明子博士の研究室に留学しました。アメリカでようやく本格的に分子生物学的手法に取り組み、ノックアウトマウスなどの解析を中心に研究を進めていました。対象とした分子は、やはりチロシンホスファターゼ絡みのもので、リンパ球内情報伝達に果たす機能を探っていました。当初は2-3年のつもりで渡米しましたが、結局丸5年間の留学になりました。大学院卒業後、日本での職を得ずにそのまま渡米したので、とにかく結果を出さないことには帰れない、とのプレッシャーから、はじめの数年はただがむしゃらに実験していました。幸いにも、2-3年で少し結果をだす

ことができ、後半の1-2年は僅かですがアメリカ生活を楽しむ余裕ができました。帰国するにあたり、日本での職を見つけなければならない状況になった時、今までの専門分野にはこだわらずに（理由はいくつかありますがここでは省略します）、と念頭に置きながら探していました。結果的に、それまでの自分にとってはあまり馴染みのなかった「骨の研究」に身を置くことになりました。オーストリアでc-Fosノックアウトマウスを使って破骨細胞分化のメカニズムを精力的に研究されていた松尾光一先生が、愛知県の国立長寿医療センターで室長として新しいラボを開くとのことで、そこに参加させていただきました。研究分野・研究環境が大きく変わったことで戸惑うこともありましたが、松尾先生からは多くのことを学ぶことができ、貴重な経験になりました。

自己紹介ということで、まだ10数年でしかない私の研究歴を振り返ってみました。あらためて数多くの尊敬する先輩方に出会い、刺激、影響されてきたことを痛感します。今の度、縁あってこちらに赴任することになりましたが、自身の研究に加えて今度は自分が影響を与える立場にもなり、不安と期待が入り交じった心境です。「研究者は何故研究するのか？」という問いがあったならば、少々乱暴かもしれませんが私の答えはこうです。「おっ…これは…もしかして……」という快感を得るためです。考えに考えた実験系を駆使して予想通りの結果が出た時、あるいは予想もしなかった結果の場合でも同じような快感が得られるかもしれません。残念ながら私の場合、小さな「おっ」の経験はありますが、どーんとでっかい「おおっ…」はまだありません。学生の皆さんにサイエンスの楽しさを伝えつつ、自身も成長していきたいと考えています。でっかい「おおっ…」を夢見ながら研究棟6階で毎日地味に実験しています。興味のある方は一度足を運んでみてください。

*



顎顔面再建学講座
組織再建口腔外科学分野

泉 直也

平成14年12月1日付けで助手に採用されました泉直也です。よろしくお願いたします。

出身は、地元の新発田市です。中学、高校、大学と卓球部に所属していて、特に中学高校時代には1日のほとんどを卓球のことを考えて過ごしていました。運動神経が格別いいわけではないため、くやしい思いもたくさんしましたが、マッチポイントを取られてもあきらめずに、時々逆転勝ちをしたこともあり、無心に白球を追っていたころに経験したことが、今の私の考え方の基盤になっています。

大学に入ってから、ずっと口腔外科医になりたいと思っていました。しかし、学部1年の組織学の講義で、骨をこわす破骨細胞というユニークな細胞が存在することを初めて知り、とても興味を持ちました。それ以来、第一解剖（現在の硬組織形態学分野）へ顔を出すようになり、電子顕微鏡で本物の破骨細胞を見せてもらったりしていました。

大学を卒業するにあたり口腔外科に残るか、解剖に残るか迷いましたが、大学院では集中して破骨細胞について研究をしてみたかったことと、最終的な進路は30歳までに決めればよかったことより、解剖に残ることにしました。大学院では、破骨細胞のゴルジ体を中心とした細胞内小胞輸送に関する研究を行いました。第一解剖は学部内のみならず、学部外との交流が多く、医学部、農学部等の人たちと交わり、各分野での研究の成果や方法など身近に学ぶことができました。内容的なことはもちろん、人間的な面でも大きな刺激を受け、よい経験となりました。研究生活はとても楽しくて続けたいと思っていましたが、一方、口腔外科をやりたいという気持ちは、4年間変わりませんでした。大学院を卒業する直前の3月の中頃に、口腔外科に移籍したいということを指導教官

の小澤英浩教授（現在は松本歯科大学副学長）にお話したところ、旧第一口腔外科の中島民雄教授に頼んで下さいました。中島教授は快く引き受けて下さり、平成10年の4月から口腔外科に入局することになりました。

口腔外科に来てからは、外来と病棟を交互にまわり、少しずつ手術の執刀もさせていただいています。自分が執刀させていただいた患者さんが、経過もよく元気に退院されていった時は、口腔外科を選んでよかったとつくづく思います。研究面では、病理学教室と生化学教室との共同研究で歯肉扁平上皮癌浸潤による顎骨吸収の病理組織学的検索、睡眠時無呼吸症候群の手術療法の一つであるレーザーを用いた口蓋垂軟口蓋形成術の臨床統計学的研究、凍結保存歯の移植に関する基礎

研究、ラジオ周波エネルギーを用いた睡眠時無呼吸症候群の治療の基礎研究等を行ってきました。今後の研究として、解剖で骨組織の形態学をやってきた知識と技術を生かして、腫瘍、嚢胞、炎症性疾患等の術後顎骨欠損に対する骨形成促進および骨再生に関する研究を行っていきたいと思っています。

私が所属している組織再建口腔外科学分野は、齊藤力教授をはじめとして、精神的、技術的にすばらしく尊敬できる先輩が多数おられます。口腔外科が私の天職かどうかはわかりませんが、スタッフの一員として、少しでも先輩に追いつけるよう臨床、研究、教育に力を注いでいこうと思っています。